



人間牧場主・年輪塾々長  
若松 進一

## アートとまちづくり

文化芸術から考える地域の活性化

長年地域づくりに関わっていると、行く先々のあちらこちらで今まで見たこともない、色々な文化や芸術による地域づくりに突然出会うことがあります。ある山奥の町で伐採した間伐材を利用し、木材を切り倒す時に使うチェーンソーで、若い作業員が遊び半分でフクロウの彫刻品を作ったところ、思わぬ出来栄えが評判となり、その後若者は腕を磨いたり仲間を集め、楽しみながら活動していくうちに、出来上がった作品の個展を美術館で開くことになりました。個展のオープニングは美術館の中庭で盛大に行われ、あのダイナミックなチェーンソーのエンジン音とともに創作する姿が紹介され、参加した人の度肝を抜き、その後地域を巻き込んだチェーンソーアートに発展して行きました。

またある町の廃校となった教室の教壇の

後の大きな黒板に、最初は落書きのつもりで五色のチョークで書いた地元中学生の絵が評判となり、人のいなくなつた教室に活気が戻り、漫画時代に育つた絵心のある若い人たちが中心になって集まり、創作活動が始まりました。そのことがきっかけで今では廃校となつた学校はチョークアートや黒板アートの聖地となり、その絵を見たり学んだりするため、他の町から多くの人を訪れ、過疎の町に新しい風が吹き始めました。

チェーンソーは木を切り倒す林産業の道具です。廃校となつた学校の黒板はかつてこの教室で学んだ子どもたちにとっては、忘れることのできない教育の道具でした。一人でチェーンソーで削つて作る動物も、黒板に悪戯っぽく書いた落書きも、奥の深い芸術や文化から見ると、アートと呼ぶには少し物足りなさを感じる人がいるかも知れませんが、大辞林によると「アートは、特殊な素材や手段、形式により技巧を駆使して、美を創造・表現しようとする人間の活動及び作品である」と定義づけています。たとしたらチェーンソーや黒板は地域の活性化に貢献する立派なアート世界のツールなのです。

ある時、埼玉県深谷市へ講演に出かけた

折、近くの行田市を訪ねました。行田市は埼玉県の北部に位置する人口8万人程のほとんど平地の街です。国宝金錯銘鉄剣が出土した稲荷山古墳をはじめ、日本最大の円墳である丸墓山古墳など大型古墳が群集する埼玉古墳群を有し、埼玉県名発祥の地として知られています。市内には古代蓮など42種類12万株の花が咲く古代蓮の里や、足袋の産地を物語る足袋蔵が点在する、江戸時代忍藩十萬石の城下町です。私が見たかったのはこれらの歴史もさることながら、田園地帯に作られた美しい田んぼアートでした。自然に植えた稲だけでアートを表現するため、農家の方の稲の栽培や苗の特徴の調査協力を得て、田植え体験の参加者総勢813名のボランティア協力で見事な田んぼアートが完成し、

2015年9月に世界一となりギネスに登録されました。世界一の田んぼを一目見ようと田んぼアート前の展望台には3時間半待ちの長い行列ができ、1か月で4万人を超える人



田んぼアート

が見学を訪れ、観光スポットだけでなく街中大変な賑わいとなり、田んぼアートは国宝や足袋蔵、古墳などをしのいで行田市の知名度アップに大きく貢献したようです。

愛媛県内に目を転じると、西予市宇和地方の盆地では古くから「わら」の保存のため、稲刈りの終わった田んぼに一本の棒を立て、その周りにわらを積み上げて保存するわらぐろ文化が残っていて、この地方の風物となっていますが、近年はコンバインの普及で稲わらは稲刈り時に細かく切り刻まれて田んぼに返されるため、年々その数は減少しているようです。そのわらぐろを保存しようと全国の同じような風習のある市町村に呼び掛け、今も伝承活動が続いている人たちがいますが、群れたわらぐろの風景もある意味アートだと思えます。また近くの田んぼでは大量のわらを使い、高さ7m、幅3m、長さ10mの親子一对のマンモス象を作って野外展示しています。2011年に伝統のレンゲ祭りというイベントをPRするため作られたそうですが今に至って続けられています。同じように今治市玉川のわらを使ったイノシシや、最近お目見えした西予市野村のわらで造った恐竜も立派な自然派アートなのです。

近頃あちらこちらで、竹を使ったアートがお目見えしています。元々日本は白砂青松そのままに、松の国と言われていましたが、近年松くい虫の影響で松が枯れ、変わって手入れの行き届かなくなった里山は、旺盛な繁殖力の竹に覆われようとしています。対策として竹炭や竹炭アート、建築資材などに活用する方法も試みられています。焼け石に水といったところのようですが、それでも竹を何かに使おうと、切り出した竹を短く切つて節を抜き、周囲に穴を開け、中にローソクの火を入れると、柔らかな竹灯籠の灯りが幻想的な世界を醸しますが、耕して天に至ると形容される宇和島市水ヶ浦の段々畑を照らす幾何学模様の光の群れは、まさにアートなのです。

平成の大合併を前にしたところ、まるで競争するかのようになり、県内の各地で運動公園や文化会館といったいわゆる箱モノが莫大な費用をかけて造られました。しかし15年余りが経った今それらの文化や芸術の拠点だと思われている箱モノは老朽化し、一般市民にほとんど使われることもなく財政難の中、ある意味負のお荷物として苦戦を強いられています。一方紙面で紹介した名もなきに等しい市民パワーの参加型アートは次第に活発化し、SNSによる

市民自前の情報発信努力もあって、広域的な広がりを見せています。地域の活性化は仕掛けづくりに参加した内なる人が楽しい・新しい・美しいの三要素を感じなければなりません。そして内なる人が外なる人に与えた感動によって、人が動き金が動き物が動き情報が動き地域が活性化するのは、可能です。

かつて私が若い頃、双海町では地域づくりの一環として、フジテレビ系「人間地上絵グランプリ」という番組に応募しました。ペニャ板250枚を使って町民250人が一生懸命動くアートを砂浜で描き、上空からヘリで撮影された地上絵動画は全国放送され、町の元気度アップに大きく貢献しました。このようにアートの資源はその気になれば無限なのです。

「チエンソー エンジン音を 響かせて  
 迫力満点 見た人度肝」  
 「廃校と なった教室 黒板に  
 チョーク落書き 漫画チックに」  
 「色々な 種類の稲を 田んぼ植え  
 八百人もが ギネスに挑戦」  
 「稲わらは 日本文化の 原点だ  
 知恵はまだまだ 八・十・八(米)ある」  
 (若松進一の実売笑阿)